短縮版アタッチメント行動チェックリストの作成とその信頼性・妥当性の検討

青木豊[1)]　福榮太郎[2)]　吉松奈央[3)]
[1)]目白大学　[2)]横浜国立大学　[3)]相州乳幼児家族心療センター

<要旨>

近年アタッチメントは乳幼児の臨床の様々な分野で広がりを見せており，児童福祉機関，里親養育，乳幼児健診，通常保育園などの場で，乳幼児を評価し発達を支援する場合，もっとも重要な観点の 1 つとして認められている。しかしアタッチメントを簡便に測定する方法は現段階では開発されていない。そこで本研究では青木ら（2006，2007，2008，2009，2010）の作成した 25 項目 3 因子からなるアタッチメント行動チェックリスト（ABCL）を，さらに施行しやすいように項目を削減させた短縮版アタッチメント行動チェックリスト（SABCL）を作成することを目的とした。

首都圏の幼稚園，保育園に通園する子どもの保護者 121 人に対し，ABCL，育児ストレスインデックス（PSI），ボンディングスケールを含む質問紙を施行した。検定の結果，「こころの理解」「非安全のアタッチメント」「安全基地」の 3 因子 12 項目からなる SABCL を作成された。SABCL は，ABCL と同じ因子構造であることが明らかとなった。また PSI，ボンディングスケールとの相関を算出した結果，構成概念妥当性を担保する結果が得られた。また本調査での新たな試みとして，SABCL 及び ABCL の下位尺度得点を合算した総点による評定を行った。その結果，SABCL 及び ABCL の総点が，アタッチメント行動の全体像を評定している可能性が示された。

<キーワード>　乳幼児　アタッチメント　短縮版アタッチメント行動チェックリスト（SABCL）
育児ストレスインデックス（PSI）　ボンディングスケール

【はじめに】

近年アタッチメントは乳幼児の臨床の様々な分野で広がりを見せており，児童福祉機関（児童相談所，乳児院など），里親養育，乳幼児健診，通常保育園などの場で，乳幼児を評価し発達を支援する場合，もっとも重要な観点の 1 つとして認められている。

一方でアタッチメントの客観的な評価は，概念上の混乱や対象が乳幼児であることなどが，大きな障壁となっている。現在，国際的に信頼性・妥当性が認められているアタッチメントの測定法として，Strange Situation Procedure（以下 SSP）（Ainthworth,1978 ），Q-sort 法（Waters et al.1980.1993）の二つが挙げられる。しかし，これら二つの測定法は，それぞれ施行条件が厳しく設定されている。SSP では Video monitor のある設備が必要であり，さらに評価者は，アメリカにおいて定められた SSP の訓練を受け，試験に合格し，資格を取得していなければならない。また Q-sort 法においても，訓練を受けた複数の評価者が，家庭訪問を行い，被験者となる母子を長時間観察する必要がある。これらの条件のため我が国では，アタッチメントの重要性は認められているものの，SSP や Q-sort 法などの確立された評価手法は，臨床現場ではもちろんのこと，研究においても国際基準に則って施行することは困難な状況である。これらのことから，エヴィデンスをもってアタッチメントを測定し，アタッチメントに基礎づけられた研究や臨床現場における介入を行うことは，現状においては困難であると言わざるを得ない。特に設備，人材，時間を必要とする SSP や Q-sort 法を，様々な制約のある臨床現場で用いることは，困難である。

そこで，信頼性・妥当性のレベルを適切な範囲で少し下げても，乳幼児に関わる広い領域で比較的簡易に利用できるアタッチメントの測定法を作ることは大きな意義があると考えられた。これらのことから代表研究者らは，質問紙によるアタッチメントの測定に関する研究を行い，アタッチメント行動チェックリスト（Attachment Behavior Checklist：以下 ABCL）の作成を目的とし，いくつかの予備的研究を行ってきた。（青木ら，2006，2007，2008，2009，2010）

ABCL の質問項目は，すでに信頼性，妥当性が確認されている Q-sort 法の 90 アイテムから選択され，構成されている。一方で，90 項目に及ぶ質問項目は，評定者の負担になると考えられ，また ABCL は，簡便にアタッチメントを測定することを目的としている。このことから Q-sort の 90 アイテム中，愛着の安全度の高い順に 15 アイテム前後と，反対に安全度の低い順に 15 アイテム前後が質問項目の候補として選定された。この選択により，Q-sort 法に含まれる，愛着行動制御システムとは関係の高くないアイテム，例えば連携行動制御システムに関連するアイテム（例：「家にお客さんがいると，みんなの注意を自分に集めたがる」）は取り除かれ，安全度の高いアタッチメント行動と安全度の低いアタッチメント行動に関係する項目が選定された。最終的にこれらのアイテム

から 29 項目を選択し，「よく当てはまる」「当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の 5 件法の質問項目を作成した。

ABCL を用いた検討は，青木らにより，施設職員，里親，保育士などを対象とし，様々な角度から検討がなされている。その結果，ABCL は，「こころの理解」「安全基地」「非安全のアタッチメント」の 3 因子 25 項目からなる尺度として，その信頼性・妥当性に貢献する予備的所見を得ている（青木ら，2006，2007，2008，2009，2010）。しかし，臨床現場や各種健診などにおいては，25 の質問項目であっても，調査対象者の負担が大きいと考えられた。

【目的】

そこで本研究の目的を， ABCL の 25 の質問項目を削減し，さらに施行の簡便な短縮版（short）ABCL（以下：SABCL）を作成し、その信頼性・妥当性を検討することとした。

またこれまでは施設職員や里親，保育士といった専門家に評定を依頼して作成した ABCL を，調査対象者を保育園，もしくは幼稚園に子供が通っている保護者とすることで，その信頼性・妥当性についてさらなる検討を行うことも第 2 の目的とした。

【方法】

＜1＞調査対象者

首都圏内にあるいくつかの幼稚園および保育園に調査の説明を行い，協力を依頼したところ，5 つの保育園と 1 つの幼稚園から協力が得られた。各保育園，幼稚園の責任者に同意書をとり，その後各保育園，幼稚園の保護者を対象にアナウンスをしてもらった。調査対象は，月齢 10 か月から 50 か月までの子どもを持つ保護者とした。その結果，121 人の保護者からの協力が得られた。回答対象となった子どもの月齢の平均は 33.65 か月（*SD*=10.29）であった。

＜2＞調査内容

①フェイスシート

子どもに関しては，性別，月齢，在胎週数，出生体重，園の利用時間，身体疾患の既往，相談経験などについて回答を求めた。また家族については，同居している家族の人数，各家族構成員の年齢，職業，学歴，健康状態，世帯年収，婚姻状況，精神科等の通院歴，相談経験などについて回答を求めた。

②アタッチメント行動チェックリスト

青木らによって作成された 25 項目の ABCL を使用した。

③育児ストレスインデックス（Parenting Stress Index：以下 PSI）

アタッチメントは，親と子の相互的な関わりに影響を受ける。そこで本研究では，構成概念妥当性を検証するために，育児に関するストレスの内容やその強度を測定する PSI を用いた。PSI は Abidin（1983，1990）によって開発され，兼松ら（2006）によって日本語版 PSI が作成されている。本研究では，日本語版 PSI を用いた（以下 PSI と記載する場合，日本語版 PSI を指す）。PSI は，78 の質問項目から構成されており，これらの質問項目は 2 つの上位概念である「子どもの側面（38 項目）」「親の側面（54 項目）」に分けられている。さらに「子どもの側面」は，「親を喜ばせる反応が少ない（8 項目）」「子どもの機嫌の悪さ（7 項目）」「子どもが期待どおりにいかない（5 項目）」「気が散りやすい/多動（5 項目）」「親につきまとう/人に慣れにくい（5 項目）」「子どもに問題を感じる（4 項目）」「刺激に敏感に反応する/ものに慣れにくい（4 項目）」の 7 つの下位概念に分けられている。また「親の側面」は，「親役割によって生じる規制（7 項目）」「社会的孤立（7 項目）」「夫との関係（5 項目）」「親としての有能さ（7 項目）」「抑うつ・罪悪感（4 項目）」「退院後の気落ち（4 項目）」「子どもに愛着を感じにくい（3 項目）」「健康状態（3 項目）」の 8 つの下位概念に分けられている。

④ボンディングスケール

養育者側の我が子に対して抱く，情緒的な絆であるボンディングはアタッチメントに影響を及ぼすと想定されている（鈴宮ら，2004）。そこでボンディングを測定することを目的として作成されたボンディングスケールを用いた。ボンディングスケールはKumarおよびMarksら（未発表）の研究チームによって開発された10項目の質問項目からなる尺度であり，鈴宮らが日本語訳している（鈴宮ら，2004）。

【結果】

＜1＞ SABCL の作成

ABCL の 25 項目について，探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。因子負荷量が.40 に満たない項目及び，複数の因子に高い因子負荷量を示した項目，計 7 項目を除外し，再度因子分析を行った。その結果，各因子の固有値は，3.53，1.95，1.57，.88，.86 であり，固有値 1.00 以上を基準に 3 因子を抽出した。

次に，各因子について，因子負荷量の高い項目から上位 4 項目ずつを抜き出して再度因子分析を行い，SABCL 尺度を作成した（Table-1）。

Table-1 SABCL因子分析の結果(最尤法, プロマックス回転)

		F1	F2	F3
こころの理解(α =.848)				
24. あなたに何かを頼まれると，あなたが何を求めているのかを，すぐに理解する		.829	.169	.017
22. あなたが「ちょうだい」と言ったり，「持ってきて」と言うとそのようにしてくれる		.810	-.037	-.024
25. 新しくおもちゃになる物を見つけると，あなたにも見てもらいたくて，持ってきたり，離れたところからあなたに見せる		.740	.042	.005
23. 自分からあなたと物を分けあったり，あなたが頼むと貸してくれたりする		.684	-.211	-.026
非安全のアタッチメント（α=.704）				
14. すぐにあなたに腹を立てる		-.039	.803	-.060
13. あなたとの活発な遊びの中で，たたいたり，ひっかいたり，噛みついたりして乱暴になる		.055	.697	.004
03. 自分の望んだことをすぐにかなえてもらえないと，ぐずぐずいったり，頑固に要求し続けたりするなど，あなたに対してわがままで，気が短い		-.011	.553	.160
15. 望みどおりのことをあなたがすぐにやらないと，まったく何もしてもらえないように振る舞う		.044	.435	-.061
安全基地（α=.641）				
10. 遊んでいる時でも，あなたの居場所を知っていて，あなたを呼んだり，あなたが移動すると，あなたの行動の変化に気づく		.134	-.005	.697
09. 遊びに出かけ，戻ってきてあなたのそばで遊び，また遊びに出かけるというように，あなたを安全な基地のように使い，周囲に探索に出かけるパターンをはっきりと示す		-.163	-.042	.667
08. あなたが遠く離れると，呼んだり，連れてこなくても，自分からついてきて，あなたの近くで遊びを続ける。その時に，今までやっていた遊びを中断したり，不機嫌になることはない		.056	-.055	.530
04. あなたに抱き上げられたり，抱きしめられたり，可愛がられることを喜び，自分からもそれを要求する		.008	.172	.370
負荷量の平方和		2.79	2.08	1.69
累積寄与率		25.74	36.80	45.88
因子間相関	F1	-	-.38	.40
	F2		-	-.14
	F3			-

第1因子は「あなたに何かを頼まれると，あなたが何を求めているのかをすぐに理解する」「あなたが「ちょうだい」と言ったり，「持ってきて」と言うとそのようにしてくれる」「新しくおもちゃになる物を見つけると，あなたにも見てもらいたくて持ってきたり，離れたところからあなたに見せる」「自分からあなたと物を分けあったり，あなたが頼むと貸してくれたりする」の4項目であった。これら4つの項目はすべてABCLの「こころの理解」に含まれている項目であり，内容の解釈としても妥当と考えられたため，SABCLにおいても「こころの理解」として解釈した。

第2因子は，「すぐにあなたに腹を立てる」「あなたとの活発な遊びの中で，たたいたり，ひっかいたり，噛みついたりして乱暴になる」「自分の望んだことをすぐにかなえてもらえないと，ぐずぐずいったり，頑固に要求し続けたりするなど，あなたに対してわがままで，気が短い」「望みどおりのことをあなたがすぐにやらないと，全く何もしてもらえないようにふるまう」の4項目であった。これら4つの項目はすべてABCLの「非安全のアタッチメント」に含まれている項目であり，内容の解釈としても妥当と考えられたため，SABCLにおいても「非安全のアタッチメント」として解釈した。

第3因子は「遊んでいる時でも，あなたの居場所を知っていて，あなたを呼んだり，あなたが移動すると，あなたの行動の変化に気づく」「遊びに出かけ，戻ってきてはあなたのそばで遊び，また遊びに出かけるというように，あなたを安全な基地のように使い，周囲に探索に出かけるパターンをはっきりと示す」「あなたが遠く離れると，呼んだり，連れてこなくても自分からついてきて，あなたの近くで遊びを続ける。その時に，今までやっていた遊びを中断したり不機嫌になることはない」「あなたに抱き上げられたり，抱きしめられたり，可愛がられることを喜び，自分からもそれを要求する」の4項目であった。これら4つの項目はすべてABCLの「安全基地」に含まれている項目であり，内容の解釈としても妥当と考えられたため，SABCLにおいても「安全基地」として解釈した。

また，それぞれについてクロンバックのα係数を算出

したところ，「こころの理解」がα=.848，「非安全のアタッチメント」がα＝.704，「安全基地」がα＝.641であった。

本研究で得られたSABCL尺度項目は，すでに青木らによって作成されたABCL尺度「こころの理解」，「安全基地」，「非安全のアタッチメント」の3因子構造に一致するものであり，含まれている項目も同様のものであった。統計的な確認を行うため，ABCLの各因子の尺度得点とSABCLの各因子の尺度得点に関して，相関係数を算出した。その結果，「こころの理解」において.879，「非安全のアタッチメント」において.869，「安全基地」において.932という強い相関が得られた（Table-2）。これらの結果からSABCLの信頼性・妥当性が確認された。

またABCL及びSABCLは，アタッチメントの全体像を把握することを目的としている。そのためABCL，SABCL全体でアタッチメントの安全度・安定性をどれだけ測定できているかを検証する必要性があると考えられた。そのため「非安全のアタッチメント」を逆転項目とし処理した後，3つの下位尺度の尺度得点を合計した値を，ABCL総点，SABCL総点とし，後の検討に用いた。またABCLとSABCLの総点の相関は.900と高い正の相関が見られた。

<2> SABCLとPSIとの関連について

本研究で作成されたSABCLとABCLの下位因子「こころの理解」「非安全のアタッチメント」「安全基地」と「総点」それぞれについて尺度得点化を行い，PSIとの関連を検討するため相関分析を行った。

①PSI「子どもの側面」とABCL，SABCLとの関連

SABCL及びABCLの下位尺度「こころの理解」「非安全のアタッチメント」「安全基地」「総点」とPSIの「子どもの側面」に含まれる7つの下位尺度とその総点との相関係数を算出した（Table-3）。その結果，「こころの理解」と，「子どもが期待どおりにいかない」の間に弱い負の相関が，「親を喜ばせる反応が少ない」と中程度の負の相関がみられた。「非安全のアタッチメント」については，「子どもの機嫌の悪さ」「子どもの気が散りやすい/多動」「子どもに問題を感じる」「子どもの側面総点」との間に中程度の正の相関が見られ，「子どもが期待通りにいかない」「刺激に敏感に反応する/ものに慣れにくい」との間に弱い相関が見られた。「安全基地」については，解釈可能な相関は見られなかった。またABCLにおいてもほぼ同様の結果が得られ。このことからSABCLがABCLと同様にアタッチメント行動を測定している可能性が示唆された。

以上の結果から，子どもに対して喜ばせてもらえない，期待どおりでないなど，子どもにネガティブな感情を抱いている親ほど、子どもの「こころの理解」が低いと感じていることが示唆された。「非安全のアタッチメント」が高いと感じている親は，PSIの「子どもの側面」の下位項目の多くと相関を示した。このことから子どもの行動に親がストレスを強く感じているほど、そのこどものア

Table-2 SABCLとABCLの各因子の相関

		ABCL			
		こころの理解	非安全のアタッチメント	安全基地	ABCL総点
SABCL	こころの理解	.879**	-.174	.265**	.698**
	非安全のアタッチメント	-.201*	.869**	-.036	-.635**
	安全基地	.315**	.001	.932**	.516**
	SABCL総点	.675**	.586**	-.547**	.900**

*p.<.05，**p.<.01

Table-3 SABCL及びABCLとPSI「子どもの側面」の下位尺度の相関

		親を喜ばせる反応が少ない	子どもの機嫌の悪さ	子どもが期待どおりにいかない	子どもの気が散りやすい/多動	親につきまとう/人に慣れにくい	子どもに問題を感じる	刺激に敏感に反応する/ものに慣れにくい	PSI「子どもの側面」総点
SABCL	こころの理解	-.404**	-.081	-.314**	.039	.023	-.234*	-.147	-.217*
	非安全のアタッチメント	.258**	.529**	.371**	.419**	.239**	.401**	.393**	.583**
	安全基地	-.260**	-.056	-.117	.035	.222*	-.043	-.023	-.128
	SABCL総点	-.494**	-.462**	-.513**	-.177	-.138	-.391**	-.339**	-.516**
ABCL	こころの理解	-.361**	-.128	-.353**	.084	-.025	-.228*	-.117	-.210*
	非安全のアタッチメント	.266**	.533**	.379**	.435**	.297**	.389**	.427**	.558**
	安全基地	-.388**	-.124	-.216*	.062	.160	-.099	-.073	-.041
	ABCL総点	-.442**	-.374**	-.410**	-.191	-.031	-.351**	-.304**	-.427**

*p.<.05，**p.<.01

タッチメントが非安全に傾くことが明らかとなった。また「安全基地」と PSI の「子どもの側面」に関しては，相関はほとんど見られなかった。良好な母子関係を示す「安全基地」と PSI において負の相関が生じるのではないかと仮定していたが，必ずしも本研究の結果はこの仮説を支持しなかった。このことから安全基地として自らが機能しているかどうかは、後に示す「親の側面」についての結果を考慮しても、育児ストレスとの間に関連がないと考えられる。

また「総点」に関しては，ABCL，SABCL 共に，「親を喜ばせる反応が少ない」「子どもの機嫌の悪さ」「子どもが期待通りにいかない」「子どもに問題を感じる」「刺激に敏感に反応する/ものに慣れにくい」「子どもの側面総点」において負の相関を示した。つまり ABCL，SABCL 総点が，高いほど，保護者は子どもの側面に関して育児ストレスを感じにくい傾向があると示唆される。このことはABCL，SABCL の総得点が，アタッチメントの総合的な安全度・安定性を測定している可能性を示唆していると考えられる。

②PSI「親の側面」と ABCL，SABCL との関連

SABCL 及びABCL の下位尺度「こころの理解」「非安全のアタッチメント」「安全基地」「総点」と PSI の「親の側面」の 8 下位尺度とその総点の相関係数を算出した（Table-4）。その結果，「こころの理解」と「子どもに愛着を感じにくい」との間に弱い負の相関が見られた。「非安全のアタッチメント」については「子どもに愛着を感じにくい」との間に弱い正の相関がみられ，「親の側面総点」との間に中程度の正の相関がみられた。一方，「安全基地」は，全ての項目との相関は見られなかった。また，ABCL においてもほぼ同様の結果が得られた。このことから SABCL が ABCL と同様にアタッチメント行動を測定している可能性が示された。

以上の結果から，子どもと非安全なアタッチメントが形成されている母親は，子どもに愛着を感じにくく，親としてのストレスを強く感じていることが明らかとなった。また子どもに「こころの理解」が形成されていないと感じている母親ほど，子どもへの愛着を感じられないことが明らかとなった。一方，安全基地としての愛着関係が形成されていることは，親としてのストレスとは関連がないことが明らかとなった。

また「総点」に関しては，ABCL，SABCL 共に，「社会的孤立」「親としての有能さ」「子どもに愛着を感じにくい」「親の側面総点」との間に有意な負の相関が見られた。つまり ABCL，SABCL 総点が，高いほど，保護者は親の側面に関して育児ストレスを感じにくい傾向があることが明らかとなった。このことはABCL，SABCL の総得点が，アタッチメントの状態を総合的に測定している可能性を示唆していると考えられる。

<3> SABCL及びABCLとボンディングスケール，PSI総点との関連について

母親と子どもの情緒的絆の形成の程度を測定するボンディングスケールと，PSI の総点，ABCL と SABCL との関連を分析するために相関係数を算出した（Table-5）。

①ボンディングスケールと SABCL 及び ABCL との関連

相関分析の結果，ボンディングスケールと「非安全のアタッチメント」との間に中程度の正の相関がみられ，「SABCL 総点」との間に中程度の負の相関がみられた。また ABCL においても同様の結果が見られた。このことから母親からの情緒的絆の形成が不十分なほど，非安全のアタッチメント行動と関連があることが示唆された。またボンディングスケールと ABCL，SABCL の総点との間に中程度の負の相関が見られた。このことから，母親から子どもへの情緒的絆の形成が不十分なほど，アタッチメントの安全度・安定性の評定が悪くなること示された。

②PSI の総点と SABCL 及び ABCL との関連

相関分析の結果，PSI の総点と SABCL の「非安全のアタッチメント」との間に中程度の正の相関が見られ，「総点」との間に中程度の負の相関が見られた。ABCL においても，同様の傾向がみられた。

Table-4 SABCLとPSI「親の側面」の下位尺度の相関

		親役割によって生じる規制	社会的孤立	夫との関係	親としての有能さ	抑うつ・罪悪感	退院後の気持ち	子どもに愛着を感じにくい	健康状態	PSI「親の側面」総点
SABCL	こころの理解	.011	-.222*	-.113	-.224*	-.091	.028	-.340**	-.108	-.230*
	非安全のアタッチメント	.262**	.279**	.288**	.290**	.268**	.066	.376**	.102	.422**
	安全基地	.111	.014	-.011	-.156	.031	.110	-.046	.157	-.039
	SABCL総点	-.202*	-.325**	-.281**	-.427**	-.268**	-.069	-.451**	-.087	-.380**
ABCL	こころの理解	-.056	-.277**	-.176	-.276**	-.091	-.025	-.326**	-.079	-.169
	非安全のアタッチメント	.341**	.261**	.309**	.331**	.342**	.132	.386**	.156	.359**
	安全基地	.040	-.094	-.043	-.225*	-.017	.126	-.125	.111	.045
	ABCL総点	-.082	-.247**	-.205**	-.325**	-.187*	.010	-.392**	-.044	-.254**

*p.<.05, **p.<.01

Table-5 ボンディングスケール，PSI総点とSABCL及びABCLの下位尺度の相関

	SABCL				ABCL			
	こころの理解	非安全のアタッチメント	安全基地	SABCL総点	こころの理解	非安全のアタッチメント	安全基地	ABCL総点
ボンディングスケール	-.184*	.463**	-.142	-.402**	-226*	.494**	-.186*	-.472**
PSI総点	-. 203*	. 486**	. 007	-. 433**	-. 243**	.537**	-. 086	-.358**

*p.<.05, **p.<.01

以上の結果から，育児ストレスを感じやすい保護者の子どもは、アタッチメント行動の安全性が低いことが明らかとなった。またPSIの総点と，SABCL及びABCLの総点の間には，負の相関が見られたことから育児ストレスが高い親ほど子どものアタッチメント行動を否定的に評価することが明らかとなった。

＜4＞各属性と各尺度の関連

本調査では，フェイスシートで，回答対象の子ども自身や家族の特性について回答を求めた。そこで各属性とSABCL，ABCL，PSI，ボンディングスケールとの関連について検討を行う。

①各属性に関する相関分析

SABCL，ABCL，PSI，ボンディングスケールの各下位尺度と，月齢，在胎週数，出生体重，幼稚園・保育園の利用時間，家族の人数，父親の年齢，母親の年齢のそれぞれの属性との相関係数を算出した。

その結果，月齢とABCL「安全基地」（-.31，p<.01）においてのみ弱い負の相関がみられた。「安全基地現象」は，はいはいからよちよち歩きの時期の特徴として、より明確に示される。本研究の対象の子どもの平均月齢はほぼ3歳であるために、この現象の特徴的な行動が減少しているのかもしれない。一方で，本来同質の現象を測定しているはずのSABCLとABCLで一貫した結果が得られなかったことは，今後検討する必要があると考えられる。

②各属性に関するt検定

性別，子どもの身体疾患の有無，子どもに関する相談の有無，保護者自身の相談の有無，それぞれに関してSABCL，ABCL，PSI，ボンディングスケールの各下位尺度のt検定を行った。その結果，ABCLの総点のみ，「子どもの疾患あり」群（平均値：41.20）と「子どもの疾患なし」群（平均値：46.22）の間に5%水準の有意差を示した（t=2.03，df=113）。それ以外の全ての項目において，有意な差は見られなかった。身体疾患の有無や，相談の有無などは，子育てにおけるストレスやアタッチメント，ボンディングに何らかの影響を与えているのではないかと想定されたが，本研究では，仮説に合致する充分な結果は得られなかった。ただ疾患のある子どもと，ない子どもの間に，ABCLの「総点」において有意差が見られた。このことから子どもが疾患を持つということが，アタッチメントの形成に何らかの影響を与えている可能性があるのではないかと考えられる。

③各属性に関する分散分析

婚姻の形態（既婚，未婚，離婚，死別），精神科通院歴（通院経験あり，通院中，なし），世帯年収（200万以下，200万～400万，400万～600万，600万～800万，800万～1000万，1000万以上），両親の学歴，それぞれを要因とし，SABCL，ABCL，PSI，ボンディングスケールの各下位尺度について一元配置の分散分析を行った。また項目によって，人数の偏りがあったため，世帯年収を「400万以下」「400万～800万」「800万以上」の3群に分け，両親の学歴を「高校卒（中学校卒を含む）」「各種専門学校（短期大学，専門学校，高等専門学校）」「4年制大学（大学，大学院）」の3群に分け，検定を行った。

その結果，婚姻の形態，精神科通院歴に関しては，すべての下位尺度において有意差はみられなかった。世帯年収においては，ABCL「非安全のアタッチメント」においてのみ有意傾向が見られた（F（2，117）=4.11，p<.05）。次にBonferroniの多重比較を行ったところ「400万以下（平均値：22.29）」群と「800万以上（平均値：27.42）」群において5%水準の有意差が見られた。つまり世帯収入の多い家族の子どもは、世帯収入の少ない家族の子どもと比較して，非安全のアタッチメント行動が多いことを示している。この結果は、従来の多くの研究に沿うものである。

次に父親の学歴においては，ABCL「非安全のアタッチメント」においてのみ有意傾向が見られた（F(2，104)=3.22，p<.05）。多重比較を行ったところ，「高校卒（平均値：25.38）」群と「各種専門学校（平均値：20.95）」群との間に5%水準の有意差が見られた。また母親の学歴においては，SABCLの「安全基地」においてのみ有意傾向が見られた（F（2，33）=3.67，p<.05）。多重比較を行ったところ，「高校卒（平均値：13.00）」群と「各種専門学校（平均値：16.50）」群との間に5%水準の有意差が見られた。以上の結果から，「高校卒」群は，「各種専門学校」群と比較し，アタッチメントの形態が不安定な可能性が考えられる。しかし，一番学歴の高い「大学卒」群と差が見られなかったことや，父親の学歴はABCLに，母親の学歴はSABCLに有意差が見られるなど，必ずしもABCLとSABCLの間で同じ結果が得られない点などは検討課題である。しかし，すでに標準化されたPSIやボンディングスケールでは，各属性による有

意差はほとんど示されていない。この点からも ABCL, また SABCL が感度のよい評定を行っているのではないかと推測される。

【本研究の結論】

＜1＞ SABCL の信頼性・妥当性について

①信頼性の検討

SABCL の各下位尺度のα係数は，「こころの理解」で.848，「非安全のアタッチメント」で.704，「安全基地」で.641 であった。特に「安全基地」の信頼係数は必ずしも高いとは言えないが，一定の内的一貫性が示され，ある程度の信頼性が確認された。

②妥当性の検討

SABCL のそれぞれの下位尺度を構成する項目は，それぞれ ABCL の下位尺度を構成する項目に対応している。また SABCL の下位尺度と ABCL の下位尺度との相関の高さからも，SABCL は，ABCL と類似した内容を測定していると考えられる。

またボンディングスケールは，SABCL の「非安全のアタッチメント」と関連があることが明らかとなった。ボンディングスケールは，特異的ともいえる母子間の関係性の悪さを測定していると考えられる。このことから SABCL のおける関係の悪さを測定する「非安全のアタッチメント」と強い相関を示したと考えられる。

また PSI との相関においては，多くの項目で相関が見られ，この結果から育児ストレスとアタッチメント行動の間に関連があるという仮説が支持された。

ボンディングスケール，PSI との相関の結果から，SABCL の構成概念妥当性が明らかになったと考えられる。また ABCL においても同様の結果が得られており，SABCL と ABCL は，アタッチメントの安全性・安定性を測定していると考えられる。したがって ABCL の短縮版である SABCL も，アタッチメントを測定するツールとして利用できる可能性が示唆された。

また各属性に関しては，限定的な関連しか認められなかった。しかし，このことはボンディングスケールや PSI にも同様のことが言え，これら二つの尺度と比較すると SABCL 及び ABCL の方が，有意な結果を示した。このことからも SABCL 及び ABCL が相互的な親子関係，つまりアタッチメント行動を測定しているのではないかと考えられる。

③SABCL 及び ABCL の総点

本研究では，SABCL 及び ABCL の総点を算出し，他の尺度や各属性との関連を検討した。その結果，SABCL, ABCL の総点は，ボンディングスケール，PSI と明らかな関連が見られている。この結果から，SABCL 及び ABCL の総得点が，アタッチメント行動の総合的な安全性・安定性を評価している可能性が示唆される。

【今後の課題】

SABCL の課題として，他の尺度との相関などから妥当性はある程度示すことができたと考えられるが，一方で「安全基地」の信頼性係数が低いことなどが，課題として挙げられるであろう。

また本調査の対象者は，community sample であり，今後臨床群などとの比較が必要になると考えられる。また本研究の対象者数は必ずしも多くなく，これまでの調査や今後の調査を含め，調査対象を増やし，検討を行う必要がある。

最後に，本研究では SABCL 及び ABCL の各下位尺度を合算し，総点として検討を行った。結果そのものは，充分に検討すべき結果が得られたと考えられるが，今後その有用性や得点を合算することの妥当性についても検討を行う必要があると考えられる。

【参考文献】

兼松百合子，荒木暁子，奈良間美保，丸光恵，荒屋敷亮子（2006）PSI 育児ストレスインデックス手引き．社団法人雇用問題研究所

Abidin, R. R（1983）Parenting stress index manual 1st ed. Padiatric Psychology Press.

Abidin, R. R（1990）Parenting stress index manual 3st ed. Padiatric Psychology Press.

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., Wall, S.（1978）Patterns of attachment：A psychological study of Strange Situation. Lawrence Erlbaum.

Waters, E., Vaughn., Egeland, B. R. (1980) Individual difference in infant-mother attachment relationships at age one：Antecedents in neonatal behavior in an urban, economically disadvantaged sample. Child Development, 51, 208-216

Water, E. (1995) The attachment Q-set. In Waters, E., Vaughn, B. E., Posada, G., et al(eds). Caregiving Cultural and Cognitive Perspectives on Securebase Behavior and Working Models. Monographs of the Society for Research in Child Development, 60(2-3, serial No 244), 247-254

青木豊（2010）被虐待乳幼児の心理・社会的発達―3つの処遇・環境における比較：施設通常養育，アタッチメントプログラムを付加した施設養育，里親養育―，子どもの虐待とネグレクト，12；42-48

青木豊ら(2006) 平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）児童虐待等の子どもの被害，及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究. 425-442

青木豊ら(2007) 平成１８年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）児童虐待等の子どもの被

害，及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究. 651-680.
青木豊ら(2008) 平成１９年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）児童虐待等の子どもの被害，及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究. 647-664.
青木豊ら（2009）：分離後の被虐待乳幼児の２つの処遇;明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 通巻44, 2008
鈴宮寛子，山下洋，吉田敬子（2003）出産後の母親にみられる抑うつ感情とボンディング障害―自己質問紙を活用した周産期精神保健における支援方法―. 季刊精神科診断学, 14-(1), 49-57